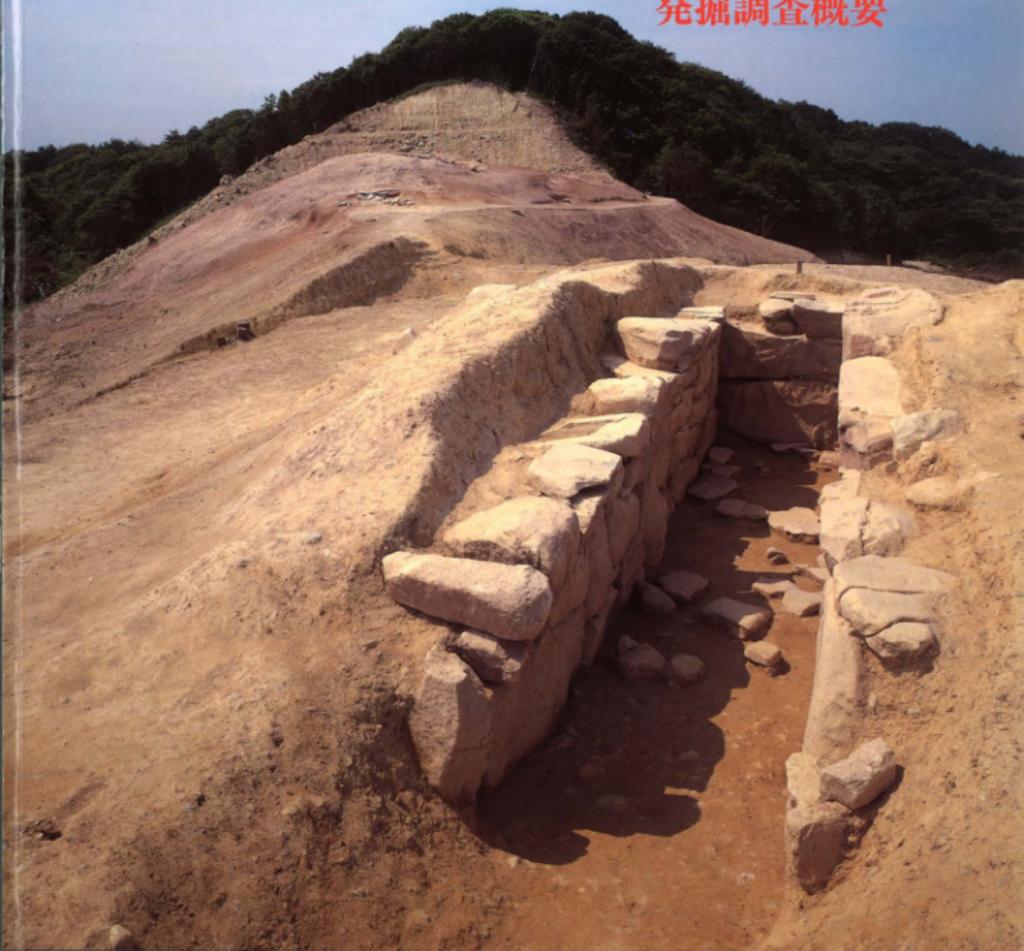


高塚山古墳群

発掘調査概要



神戸市教育委員会
1994

目 次

序

はじめに	1
古墳群の概要	1
1号墳	5
2号墳	9
3号墳	15
4号墳	19
5号墳	22
6号墳	23
7号墳	27
8号墳	33
9号墳	41
まとめ	45

例 言

1. 本書は、高塚山古墳群1~9号墳の発掘調査概要報告である。
2. 発掘調査は資材営場造成に伴うもので、神戸市教育委員会が、東候物産株式会社から委託を受けて、実施したものである。
第1次調査は1991年3月1日から同年9月4日までの間に、第2次調査は1991年12月3日から1992年5月8日までの間に実施した。
3. 本書の編集は、丹治康明、橋詰清孝が担当した。
4. 造構写真の多くは、奈良国立文化財研究所 牛嶋茂氏に撮影していただいた。本書に掲載した写真は、牛嶋茂氏による撮影のものと、担当者の撮影のものがある。なお、航空写真は、東候物産株式会社の提供によるものである。
5. 表紙は、2~6号墳遠景(牛嶋茂氏撮影)、裏表紙は、復元された1号墳(楠幸堂 楠本真紀子氏撮影)の写真を使用した。

序

高塚山古墳群は、明石海峡に面し、紀淡海峡から瀬戸内海に浮ぶ淡路島や小豆島をも見渡すことのできる小高い丘陵上の絶景の地にあります。

今回は、総数15基の中の9基の古墳を発掘調査しました。そのひとつひとつが、黄泉の国に先人を送る古代人の心の一端を現代に伝える記念物といえるものです。この中には、石室の壁に馬や魚の絵を描いたものがありました。また、複室構造やT字形の横穴式石室、石室の中での火葬跡など全国的にも珍しい発見が相次ぎました。これらは学術的にも貴重な発見でしたが、現代を生きる我々にも数々のロマンを与えてくれました。1tを超える大石をどのように運び上げたのでしょうか。どの様な思いで石に絵を刻んだのでしょうか。

本書は、これらの古墳の現地調査の概要を記したもので、広く市民の皆様にご活用いただければ幸いに存じます。

発掘調査及び本書の刊行にあたり多くの方々のご協力を得ました。最後になりましたが、厚くお礼申し上げます。

平成6年3月31日
神戸市教育委員会

はじめに

高塚山古墳群は、古くからその存在は知られていたが、不明な点が多かった。しかし、昭和50年頃宅地造成などの開発の計画がおこり、分布調査や試掘調査が行われた結果、古墳群の範囲やその数などが確認されていた。

今回、資材置場造成が計画されたため、予定地にある9基の古墳(面積約7,000 m²)の発掘調査を実施した。この部分は古墳群の南半分にあたる。

平成3年3月から9月に実施した1次調査では、2号墳から6号墳までの5基を調査した。この調査では、分布調査や試掘調査では発見されていなかった小型の横穴式石室2基(3・5号墳)を新たに確認することができた。また、神戸市内では、はじめての発見となった線刻画が描かれた横穴式石室(2号墳)を発見した。

平成3年12月から平成4年5月に行った2次調査では、1・7~9号墳の4基を調査した。この調査でも線刻壁画の描かれた横穴式石室(9号墳)が確認されたほか、複室構造の横穴式石室(1・8号墳)や石室内で火葬跡(8号墳)が検出され、多様な石室構造や特異な葬送の存在が判明した。

古墳群の概要

高塚山古墳群(神戸市垂水区多聞町字小東山所在)は、福田川と伊川に挟まれた丘陵上に存在する、総数15基からなる古墳群である。埋葬施設は、いずれも横穴式石室を採用しており、築造は6世紀後半に開始されている。

福田川流域には、高塚山古墳群以外の古墳群は確認されていないが、高塚山の南西を流れる山田川流域には、横穴式石室を埋葬施設とする古墳群が数多く知られている。なかでも舞子丘陵に所在する舞子古墳群は、現在では、約20基程度が残っているにすぎないが、かつては100基以上の古墳が存在していたと考えられている。この古墳群は、高塚山古墳群に先行する6世紀前半に古墳の築造が開始されている。

また、高塚山古墳群の周辺には、この時期の集落遺跡の発見はなく、この古墳群に埋葬された人々の生活の場を明らかにするには至っていない。

高塚山は、地質的には神戸層群に属しており、これに含まれる凝灰質砂岩を切り出して石室の石材として用いている。1号墳がある東にのびる尾根筋や3~6号墳がある尾根筋には、凝灰質砂岩の露頭がみられる箇所がある。また、尾根筋の一部に自然の絶壁があり、石材を切り出した、石切り場であった可能性があるが、確認することはできなかった。



fig. I 露頭する凝灰質砂岩



fig. 2 高塚山古墳群の位置と周辺の古墳

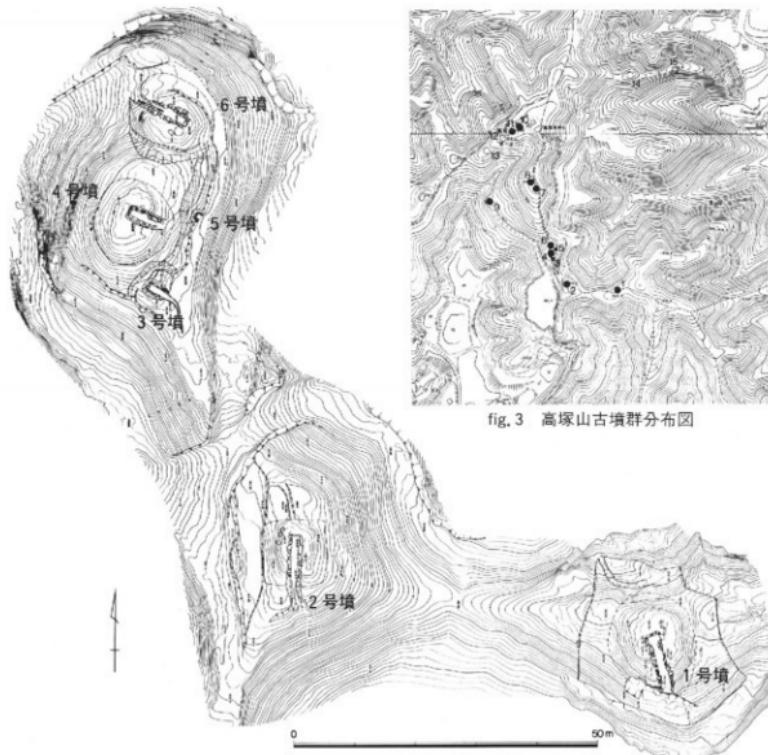


fig. 3 高塚山古墳群分布図

fig. 4 高塚山古墳群1～6号墳 地形測量図



fig. 5 東上空から見た高塚山古墳群



fig. 6 2~6号墳全景(牛嶋茂氏撮影)

1号墳

位置 1号墳は、高塚山古墳群の中で最も南に位置し、墳丘頂部の標高は164.6mと最も低い所に造られている。調査前の状況は、墳丘頂部から南にかけて大きく窪み、墳丘南裾が削平され石材が露出していた。そして、南斜面には石材と須恵器片が散乱しており、過去に盗掘に遭った状況がうかがわれる。

当古墳群では、3～6号墳や7・8号墳のように1つの尾根頂部に2基以上の古墳が近接して築造されているものと、当古墳と2号墳のように、他の古墳からすこし離れた狭く小さな尾根の頂部に単独で存在しているものがある。

墳丘 墳丘は東側と西側で尾根を切断するように溝状に掘削し、盛土を行って築いている。狭い尾根上にあるため南北に長い楕円形の墳丘となっている。墳丘の現存高は約2.5mであるが、開口部である墳丘南裾が比較的急な斜面となっており、石室入口側から見た墳丘はかなり大きく、高く見える。



fig. 7 南上空から見た1号墳



fig. 8 1号墳全景 墳丘裾(西側)に列石を巡らせている。後方は最高所にある7号墳。

石室 石室は、両袖式で南西に開口している。この石室は、玄室と前室・羨道に分かれた複室構造の横穴式石室である。また、玄室の横幅が玄室長より広い形の「T字形」の石室である。このような石室は非常に珍しく、近畿地方では他に類例のない構造のものであることが明らかとなった。

構築状況(玄室) 玄室は、横幅が奥行よりおよそ3:2の割合で広い。玄室を構築するにあたっては、厚みのある板状の基底石を立てて据えており、2段目から上は小口積みにしている。奥壁は、東側をこの石室のなかで最大の板石を立て、西側も大きな石材を3段に据えて造っている。持ち送りは認められず垂直に壁が立ち上がっている。東の袖石は大型の石材を立てて据えているが、西袖石は前室側壁に沿って小型の薄い板石を立てている。玄室に使用されている石材は、前室、羨道の石材に比べて非常に丁寧にノミ状工具で石材の表面を調整している。



fig. 9 墳丘測量図



fig. 10 前室から玄室を見た石室内部の状況

前室 前室は玄室の袖石から南に左側壁が約2.5mにわたり、15cm程広く造られている。前室入口の左側壁には、大型の石材を横位に据え置き、袖を造っている。石材の構築は、玄室と同様であり、基底石に、厚い板石を立てて使用しており、2段目から上は、小口積みにしている。持ち送りではなく、垂直に近く積み上げられている。床面には、5枚の板石があり、棺台として使用された可能性がある。

羨道 6mと長い羨道を構築しているが、前室の南端から南へ2mの両側壁には、約50cmの石材が積まれていない部分がある。これを境に南側の両側壁は、小型の石材を多用し、乱雑に積み上げられている。また、主軸もこの部分からやや南西方向に振っており、床面も、緩やかに傾斜している。この石積みのない部分には、何か扉のような施設が造られていた可能性が考えられる。

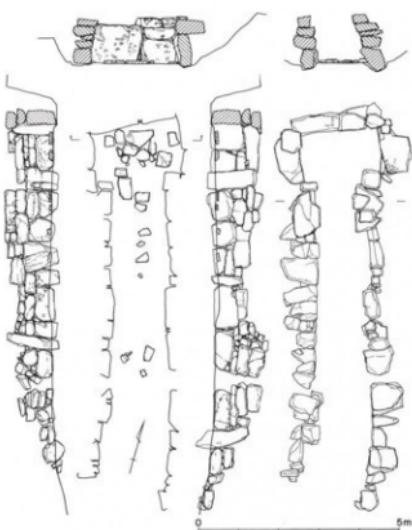


fig. 11 石室実測図



fig. 12 玄室全景



fig. 13 石室全景



fig. 14 表土直下で検出された須恵器壺の口縁



fig. 15 墳丘築造過程の祭祀に使われた土器

墳丘築造過程の祭祀 墳丘の盛土の中から須恵器が出土した。羨道入口の左側壁側の墳丘中にあたり、遺物が出土した付近は盛土を築く際に一度平坦に整えられ、その上面に土器を置いたものと推定される。土器の出土した高さは、現状の側壁の最上段の高さと一致している。土器群は壺を中心に、すぐそばには短頭壺と口縁部を欠いた甕が置かれ、そのまま東側には高环2点とミニチュア台付無頭壺2点が、北と南に分かれて1点ずつ置かれていた。これらの土器群は、墳丘を築成する途中での祭祀で使用されたものと考えられ、最終的な盛土を行った際、この土器も埋納され墳丘の築造が完成したと推定される。



石室内の出土遺物 玄室からは、刀身や銅の破片が出土し、鉄製の直刀が副葬されていたことがわかる。また、北東隅と南東隅には須恵器環身・環蓋が、北西隅には、ミニチュアの提瓶が基底石にもたれ掛かるように出土している。

前室、羨道においても、須恵器環身・環蓋のほかに、ミニチュアの高环や台付長頸壺が出土している。これらの出土遺物からこの古墳の築造時期は、6世紀後半と考えられる。

fig. 17 墳丘上の出土遺物実測図

2号墳

位置 高塚山の最高所、高塚竜神社が所在する地点から南にのびる尾根筋には、古墳群中のほぼ半数にあたる8基の古墳が築造されている。2号墳は、この尾根筋の最も南の部分に築造されている。墳丘頂部の標高は166.78mである。

2号墳は、1号墳と同様に他の古墳から少し離れた小さな尾根の頂部に1基で存在している。この2号墳がある地点から尾根が東方に分岐しており、この尾根筋に1号墳が位置している。

墳丘 南北12m、東西11mの方墳である。墳丘を画する周溝は認められなかったが、墳丘の裾は、地山を削りだし、方形に基底部を造りだしている。

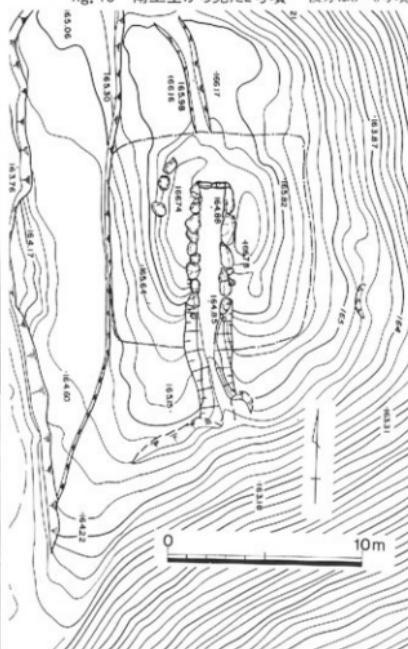
盛土内には、凝灰質砂岩の破片が厚さ5cm程、面をなし堆積していた。これは、石室構築の際に高さを整えた段(3・4段目)の上面に一致し、墳丘の築造が石室の構築工程に合わせて行われたことが知られる。



fig. 18 南上空から見た2号墳 後方は3~6号墳



fig. 19 墳丘全景(牛嶋茂氏撮影)



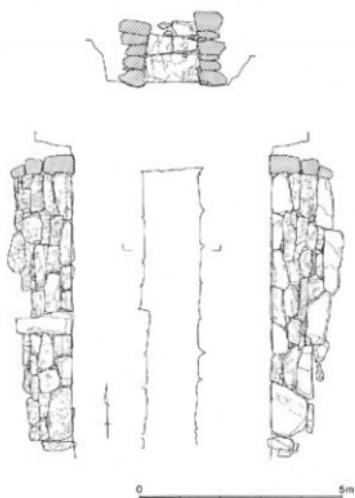


fig. 21 石室実測図

石室 南に開口する右片袖式の横穴式石室である。石室内は、盜掘を受けたと思われ、天井石や敷石の一部が失われていた。石室は、玄室を5段、羨道を4段に積んでいる。玄室の高さは、崩落しかかった天井石が1枚残っていたため、床面から1.7mあったことがわかった。

石室を構築するにあたっては、基底石と2段目の石材をほぼ垂直に積み、3段目からは少しづつ内傾させている。石室側からの壁面の観察では、石室構築途中で一旦、石の上面を水平に整えたところ（以下目地と呼ぶ）がある。この石室には2段目、3段目と4段目にある。また、石室の入口には、小さな柱状の石が立てられていた。

玄室の床面には、石が敷かれていたと考えられるが、後世の攪乱によって部分的に残っているだけであった。排水溝はなく、石室入口から南へ、幅2mの墓道が掘られている。



fig. 22 石室全景(牛鳴茂氏撮影) 羨門には柱状の石を立てている。



fig. 23 左側壁にある線刻画(牛嶋茂氏撮影)

線刻画石の位置 玄室入口の左側壁の一石に、線刻画が描かれていた。線刻画の描かれた石材は、3段目の石を積み上げた後、奥壁側から玄室入口に向かい、4石を並べた時点で、小石と凝灰質砂岩の破片を敷いて線刻画石を置いている。また、線刻画石の隣の石は、線刻画石の形にあわせて、ノミ状工具によって削り、石の安定を保っている。

また、線刻画石の周辺に積まれた石材は、他の石材と比べて丁寧に石面をノミ状工具で調整されていた。



fig. 24 線刻画石の下に敷かれた小石



fig. 25 線刻壁画(牛嶋茂氏撮影) 「甲」・馬・家は、太く力強い線で描かれている。

線刻画 長さ110 cm、幅50cmの凝灰質砂岩前面に、線刻画が描かれていたか。石材の下半部は剥落し、どのような図柄が描かれていたかは不明である。線刻は、石の右側から「甲」の字状のものと、中央に馬、その左に三角や縦横の直線を連続させている。これは家かと思われるがよくわからない。

馬は、たてがみを立てて頭を右に向け、前脚を僅かに曲げて立っている状態が表現されている。脚は先端で小さく屈曲し、蹄にいたるまで細かく表現されている。尾は、細い線で描かれ、背中には、鞍の様な表現も見られる。家と思われるものは、切妻の建物を表現しているように思われるが、剥落が激しく詳細は不明である。



fig. 26 線刻壁画 馬 (牛嶋茂氏撮影)



fig. 27 線刻壁画 建物と思われる線刻(牛嶋茂氏撮影)



fig. 28 玄室壁面の状況



fig. 29 線刻画石に残る工具痕(牛嶋茂氏撮影)

fig. 30 玄室左侧壁に残る工具痕(牛嶋茂氏撮影)



fig. 31 玄室右侧壁に残る工具痕(牛嶋茂氏撮影)

工具痕 凝灰質砂岩を用いて構築された石室の壁面には、石材加工時に使用された工具の痕跡が残っていた。石材に残された工具痕から数種類の工具と使用法があるようである。また、石室の目地が通る石の上面にも、ノミ状工具による加工が見られることが石室の解体調査において判明した。石材が石室構築工程の中でも再加工や細部の調整を行っていたことがわかる。



fig. 32 玄室から羨道を見た石室内部の状況(牛嶋茂氏撮影)

遺物の出土状況 石室は、平安時代後期に再利用されており、同時期の遺物が羨道部より出土した。また、それ以降にも盗掘を受けており原位置を保った遺物は少なかった。出土した遺物には、馬具や鐵などの鉄製品、須恵器環や高环などがある。石室外西側の墳丘裾には、須恵器甕が据えられた状態で検出された。また、羨道では須恵器環身の中に金環が1点入って出土している。このすぐそばでは、須恵器環身が小片となって壊れ、金環が1点出土している。

これらの遺物から6世紀後半に築造され、7世紀初頭まで追葬が行われていたと思われる。

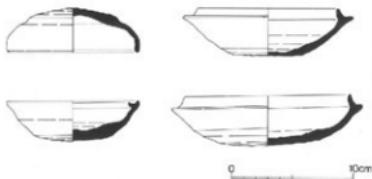


fig. 33 出土遺物実測図



fig. 34 玄室北東隅の遺物出土状況



fig. 35 羨道出土の金環が入った須恵器環身

3号墳

位置 4号墳墳丘の南東裾に接して3号墳が築造されている。発掘調査前の状況では、墳丘らしき高まりは認められず確認されていなかったが、今回の調査により新たに発見された古墳である。

墳丘 3号墳は、斜面に築造されているため、墳丘の流出が激しく、盛土は失われ墳丘の高まりは確認できなかった。墳頂部の標高は、167.12mである。

周溝は、石室の背後(北側)を半円状にめぐっているが、東側は後世の削平によって失われている。周溝の規模は、幅1.4m~1.6m、深さ30cm~70cmで断面U字状をしている。周溝は、地形にそって掘られ、石室背後が浅く、両端に近づくほど深くなっている。周溝によって区画されることから直径8mの円墳と推定される。



fig. 36 3号墳全景 4号墳の斜面を削って築造している。



fig. 37 3・4・5号墳遠景(牛嶋茂氏撮影) 6号墳は4号墳の北斜面にあり見えない。

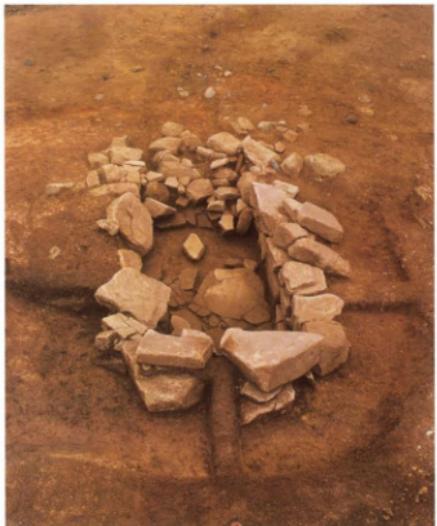


fig. 38 3号墳石室閉塞の状況

石室 表土を取り除くとすぐに石室が検出された。現状では、土圧によって石室が崩壊し、天井石や左側壁の大半が石室内に落ち込んではいたが、盗掘の形跡はなかった。石室は、南東方向に開口する横穴式石室で、石室全長が3.2mと、今回調査をした古墳の中では、最も小型のものである。石室の平面形態は無袖式で、玄室と羨道の区別がつかない。しかし、奥壁から2m程離れた床面に、板石が2枚敷かれており、これを境として玄室と羨道の区別をしていたと考えられる。基底石もこの板石のあるところからわずかに屈曲し、石室の幅が狭くなっている。玄室奥の床面には、凝灰質砂岩の板石が敷かれている。羨道には擎大の角礫を充満させ閉塞している。羨道の南には、墓道のがのびていた。

天井石は4石あったものと思われるが、すべて石室内に落ち込んだ状態で検出された。調査では、天井石らしき石材は羨道上には確認できなかった。



fig. 39 3号墳石室全景(牛嶋茂氏撮影) 玄室・羨道の境に板石を敷いている。



fig. 40 3号墳石室側壁の構築状況(牛嶋茂氏撮影)



fig. 41 奥壁の状況



fig. 42 板石を立てた玄室の基底石

石室の構築 石室構築にあたっては、玄室の基底石は板石を立てて置き、羨道は、横に寝かせて置いている。2段目より上は、いずれも小口積みをしている。持ち送りではなく、ほぼ垂直に積み上げられている。天井石や側壁上部の石材が石室内に落ち込んでいたが、石室の高さは、復元すれば敷石上面から約0.6mであったと推定される。石室に使用されている石材は、凝灰質砂岩を板状に割ったものを使用している。石材の面取り等の調整は数石に認められるが、大半が割ったままの状態で使用されている。



fig. 43 石室の構築状況

遺物の出土状況 石室は、天井石が崩落しているが盗掘された痕跡はなかった。

副葬品としては、玄室の北西隅に須恵器环身と环蓋が置かれていたただけで、他にはなにも発見されなかった。玄室北西隅に置かれた須恵器は、环蓋を下に置き、その上に、口縁を合せるように环身をかぶせた状態で出土した。

石室の規模や遺物の出土状況等から、この古墳においては、追葬は行われなかった可能性が高いと考えられる。

築造の時期 石室内から出土した須恵器は6世紀後半と考えられる。



fig. 46 玄室遺物出土状況

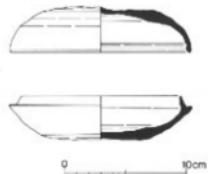


fig. 44 出土遺物実測図

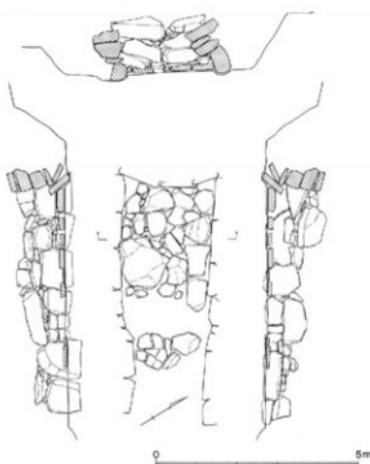


fig. 45 石室実測図



fig. 47 玄室北西隅に置かれた須恵器環身



fig. 48 須恵器環身の下に置かれていた環蓋

4号墳

位置 7・8号墳から南に下った尾根の稜線上に4号墳は築かれている。墳丘頂部の標高は169.4mで、尾根の頂きに位置する7号墳との間の比高差は20m近くある。

墳丘 発掘調査前の状況では、墳丘はかなり流出しており、盛土は全く認められなかつた。また、部分的には地山の凝灰質砂岩の岩盤が露出している箇所もあつた。石室上面も露出し、天井石が抜取られ、東斜面に遺物が散乱していたことから盗掘を受けたと考えられる。

表土を取り除くと、すぐに凝灰質砂岩の岩盤があらわれ、盛土の有無は確認できなかつた。明瞭な周溝もなく墳丘の規模は不明確であるが、墳丘裾をわずかに削り出した痕跡があり、これをもとに推定すると径約13mの円墳であったと思われる。

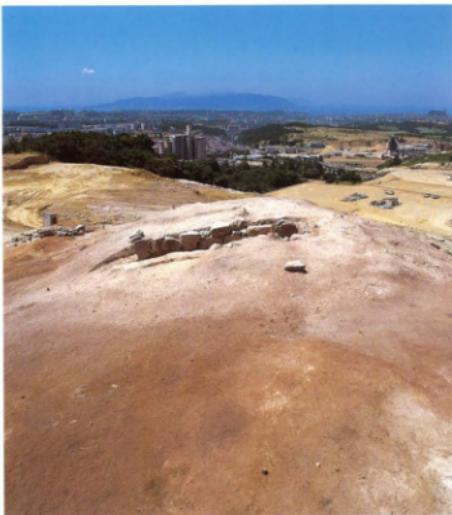


fig. 49 墳丘全景



fig. 50 東上空から見た4号墳



fig. 51 石室全景(牛嶋茂氏撮影)

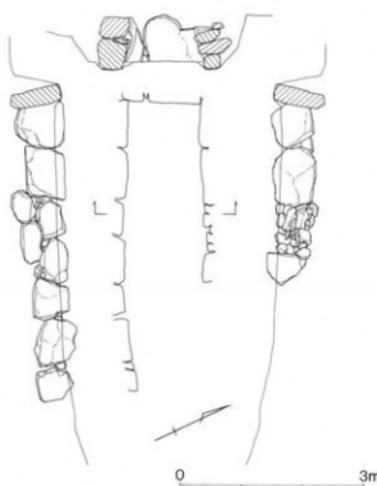


fig. 52 石室実測図

石室 石室は凝灰質砂岩を使用した東方に開口する横穴式石室である。石室は、盜掘時にかなり破壊され、北側の羨道部分が失われており、大半は基底石のみが残されていた。

石室の平面形態は、北側の羨道部が失われているため明かではないが、石材抜取り穴からは左片袖式の石室であったと考えられる。ただ、石室の形状、構築方法が3号墳とよく似ているため無袖式であった可能性もある。

石室掘方は、石室ぎりぎりに凝灰質砂岩の軟岩盤を掘り込んでいる。この掘方床面に基底石を据え置くための穴を掘り込んでいる。基底石は、やや厚めの板状の石材をやや内傾させて立てている。また、奥壁から2.9mのところでやや内側に屈曲させ据え置き並べており、石室の幅が狭くなっている。この石室幅が狭くなるところが、玄室と羨道の境となっていたと思われる。

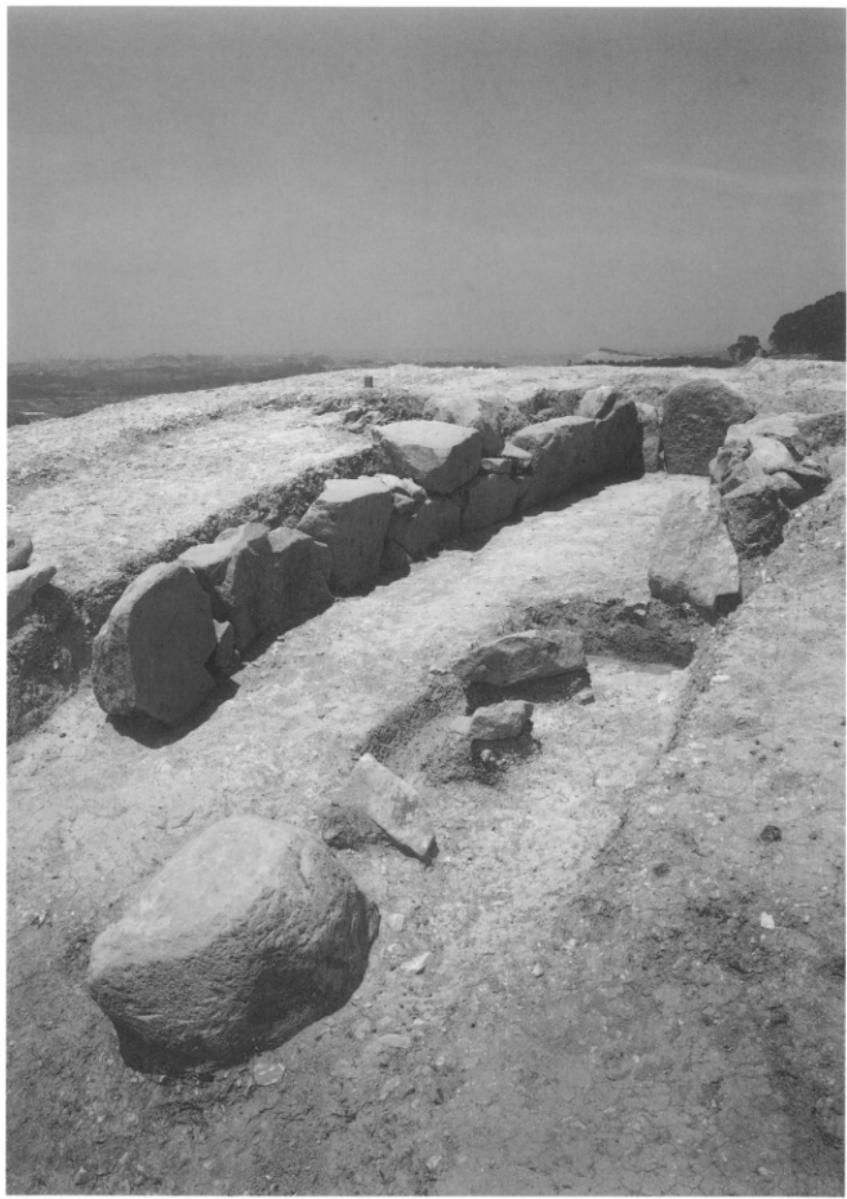


fig. 53 側壁の状況(牛嶋茂氏撮影)



fig. 54 玄室全景

石室床面の状況 石室の床面は、玄室、羨道とともに、敷石はなかった。玄室の床面は凝灰質砂岩の軟岩盤を水平に削り出しているが、羨道部においては、緩やかな傾斜面をなしている。排水溝はなく、墓道についても、石室東側は急斜面となっており、明らかにすることことができなかつた。

遺物の出土状況 玄室の中央西端で耳環2点と、玄室東北隅と羨道入口に耳環1点ずつ、同中央、右側壁に沿うように刀子1点が出土した。羨道部には少量の須恵器片が出土したがこれらは、原位置を保っていない。遺物の大半は、東の斜面で出土している。

築造時期は、出土した須恵器から6世紀後半と考えられる。

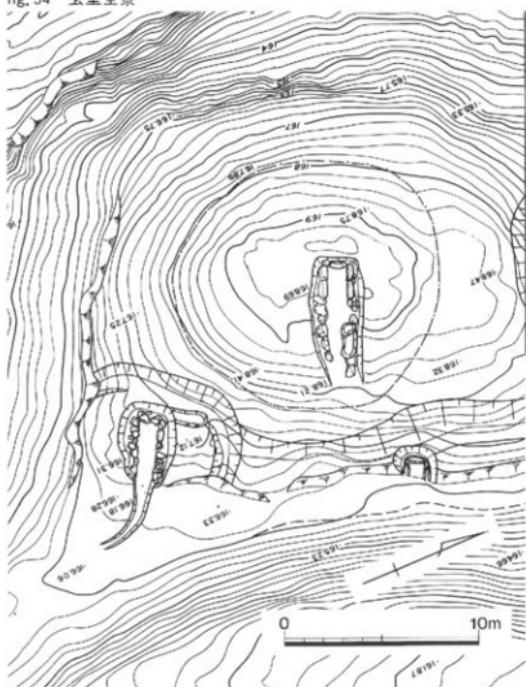


fig. 56 3~5号墳墳丘測量図



fig. 55 石室掘方だけを残す5号墳

5号墳

4号墳の東側の斜面に築造されている。山道によって大きく削られ、石室掘方をわずかに残す程度で、大半は失われていた。石室掘方内の石材の抜き取り穴から、3号墳と同じ様な小型の横穴式石室であった可能性が高い。全く遺物が出土していないため、築造時期については不明である。

6号墳

位置 4号墳が位置する尾根頂部の北斜面に6号墳は築造されている。4号墳と7・8号墳がある尾根頂部間の尾根鞍部に位置しているため、眺望は他の古墳に比べあまり良くない。墳丘頂部の標高は、168.00mである。

調査前の状況は、墳丘の北半が大きく山道によって削られ、墳丘頂部は大きく窪み、石材が露出していた。西斜面には、石材片と須恵器片が散乱しており、過去に盜掘に遭った状況が確認された。

墳丘 4号墳の北斜面にあるため、南側に深く、幅の広い周溝を掘込んでいる。墳丘の南半は凝灰質砂岩の岩盤を利用している。周溝はほぼ全周していたものと思われるが、北半は山道によって削平され、わざがにその痕跡を残すだけであった。



fig. 57 西上空から見た6号墳



fig. 58 墳丘全景(牛嶋茂氏撮影)

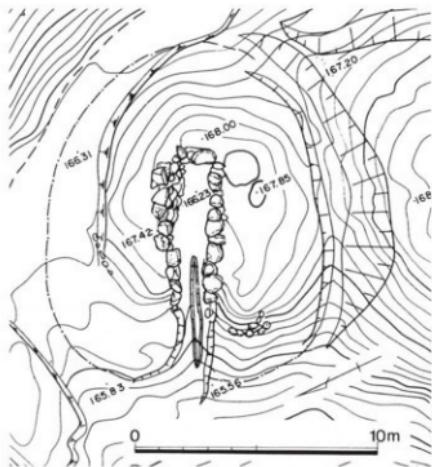


fig. 59 墳丘測量図



fig. 60 墳丘全景



fig. 61 墳丘盛土下検出の列石実測図



fig. 62 墳丘下の列石

墳丘の築成状況 墳丘は、ほぼ全周していたと思われる周溝から判断すると楕円形をしていたと思われる。墳丘盛土を取り除くと、凝灰岩の地山上に、ほぼ方形に区画した列石が検出された。

この列石は、石室全体の周囲をかこむのではなく墳丘の頂部から西半に並べられたものである。急斜面となる西斜面には、2段に積まれ、墳丘頂部では1段に凝灰質砂岩の角礫が並べられている。この列石は、墳丘裾を画するものではなく墳丘盛土内に積まれたものであり、墳丘盛土の築成にあたって何らかの機能をしていたものと考えられる。



fig. 63 石室全景(牛鳴茂氏撮影)

石室 西方に開口する右片袖式の横穴式石室である。後世の擾乱によって天井石は1石も残らず、羨道入口の一部も石材が抜き取られていた。

石材は、凝灰質砂岩を用いている。石材の面取り等の加工痕は、数石あるが全体的には割ったままの状態で積み上げられている。

石室壁面は目地が通らず、乱雑に積み上げられている。玄室は、5段、羨道は3段の石積を調査で検出した。石材構築においては、基底石を垂直に立てて、その上段からは少しづつ持ち送っている。3段目になると更に内傾させている。玄室の東北隅では、側壁から奥壁へ石材を斜めに架け、組合せながら構築している。



fig. 64 奥壁・側壁の構築状況



fig. 65 淹道床面の敷石



fig. 66 ノミ状工具で調整された敷石



fig. 67 板石で塞れた排水溝

渋道床面の状況 渋道の床面には排水溝が掘られ、これを覆うように上面に敷石が敷かれている。渋道入口の一石目は、ノミ状工具によって丁寧に調整された板石を使用している。また、この板石の東側では、溝の形に割った板石をつめて排水溝を塞いでいる。

出土遺物 石室内は、盜掘を受けており原位置を保っているものは少ないが、須恵器の他に、馬具などの鉄製品も出土している。渋道の敷石下の排水溝からは小さく割られた須恵器环身・环蓋や赤色顔料が入った甌が出土している。これらの出土遺物から築造時期は、6世紀後半と考えられる。

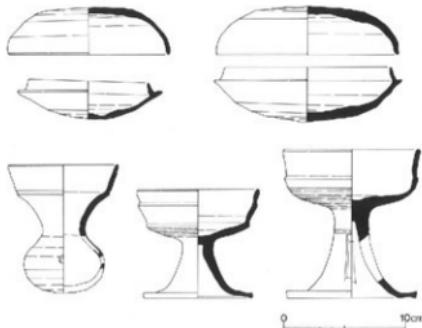


fig. 68 出土遺物実測図



fig. 69 排水溝内出土の須恵器環身・环蓋



fig. 70 玄室の遺物出土状況

7号墳

位置 高塚竈神社が所在する高塚山の最高所からわずかに南に下った尾根頂部に7号墳は築造されている。この尾根頂部は、7号墳と8号墳の2基で占められている。

調査前から7号墳は、墳丘の高まりも明瞭で、中央が窪み石室の石材の露頭もあり、古墳であることが容易に確認できた。8号墳も墳丘の高まりは、さほど顕著ではなかったが、中央部が窪み石室の位置がおよそ判明していた。7号墳の墳丘頂部の標高は、188.27mを測り、眺望にすぐれ古墳群中最も高い位置に立地している。

墳丘 東西13m、南北17mの楕円形である。墳丘高は、約3.5mで当古墳群中、最も大きな墳丘規模を持つ。墳丘は周溝による区画は認められないが、地山を段状に整形し裾部を造っている。

そして、墳丘の南側には上下2段に外護列石が設けられていたが、西側の上段の列石は流出している。下段の列石は、墳丘裾の境界に置かれ、上段の列石は地山と盛土の境界に置かれている。



fig. 71 墳丘測量図

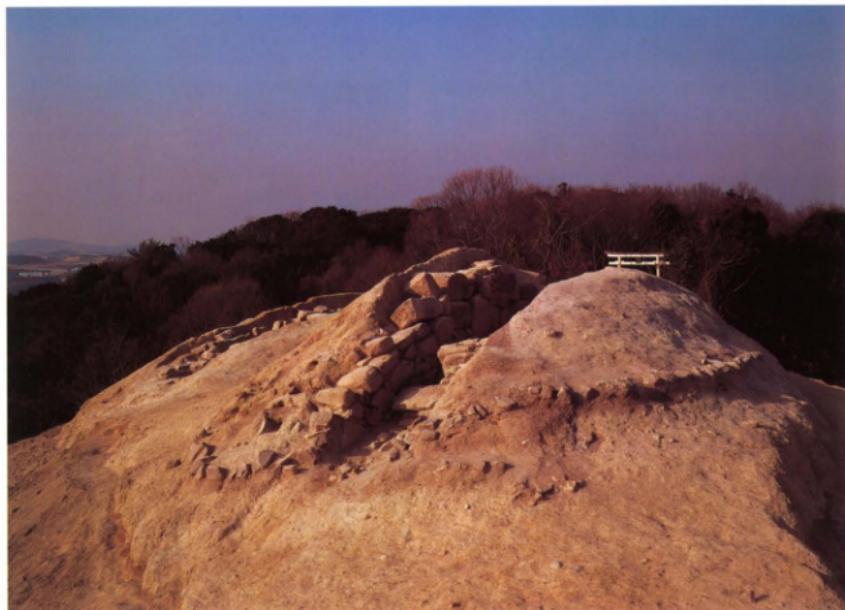


fig. 72 7号墳墳丘全景(牛嶋茂氏撮影) 墳丘裾及び地山と盛土の境に、外護列石を二重に巡らせている。



fig. 73 7号填石室全景(牛鳩茂氏撮影)



fig. 74 巨石を使用した閉塞石(牛鳴茂氏撮影)

側道を1石で閉塞している。閉塞石と側壁にできた隙間には小石を詰めて塞いでいる。



fig. 75 石室右側壁の構築状況



fig. 76 玄室全景(牛嶋茂氏撮影)

石室 南西に開口する右片袖式の横穴式石室である。この石室は、古墳群中で最も石室高が高く、残存高2.6mである。石材も大型のものを多用する石室である。

石室は、玄室が5段、羨道を4段の石積が残っていたが、天井石は崩落していた。石室構築にあたっては、奥壁の基底石を垂直に立て、側壁はわずかに内傾させ少しづつ持ち送っている。最上段に近い玄室の北西隅は、奥壁から側壁にかけて石材を斜めに架け、持ち送りながら石材を組み合わせている。右側壁の玄門付近では、3段目以上の石材に、長辺が1.5mを超す大型のものを積み上げている。

また、石室の床面は、玄室では水平に仕上げられているが、羨道部では、袖石を境に石室外へ緩やかに傾斜させている。基底石もこの床面に合わせて据え並べているため、羨道の石積みは、袖石を境に床面の傾斜にそって目地が斜めに通っている。最上段の石材上面も、埴丘の傾斜面に一致している。

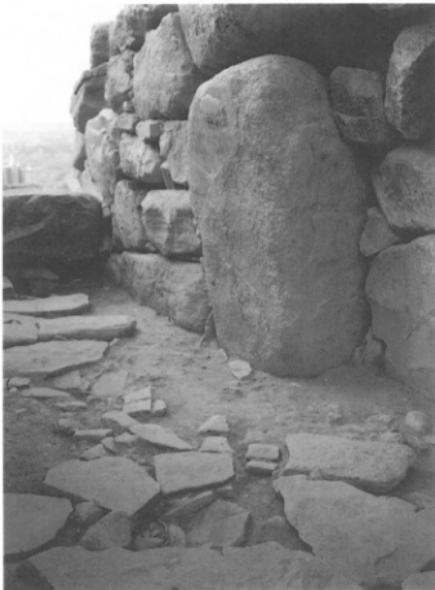


fig. 77 巨石を立てた袖石(牛嶋茂氏撮影)

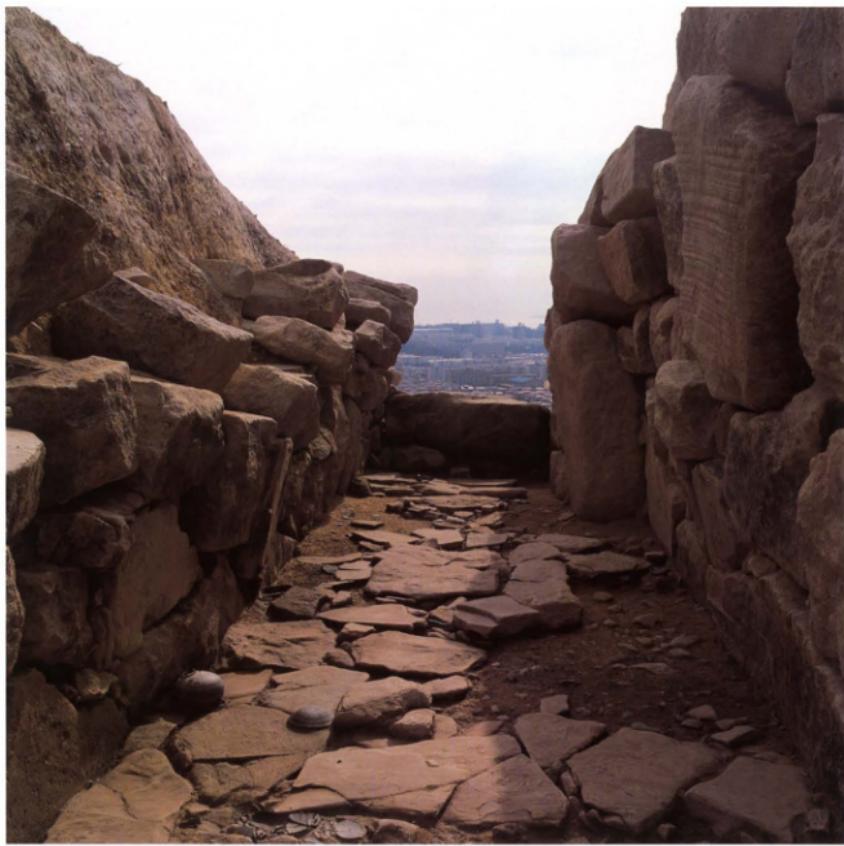


fig. 78 石室内の遺物出土状況

遺物の出土状況 玄室からは、馬具や鉄鎌などの鉄製品の細片や、金環・鞘金具などとともに、須恵器の平瓶や环・高环などが出土している。複数の埋葬が行われているようで、敷石の下からも遺物が出土した。

敷石の下からの遺物は少ないが、敷石直上のものは、6世紀後半の遺物が多く出土している。これより、少し上層には、6世紀末頃の遺物が多く出土している。

また、平安時代後期の遺物が出土しており、石室が再利用されていたと考えられる。さらに、近代の遺物を含む擾乱が石室床面にまで達しており、多くの遺物が失われたと考えられる。

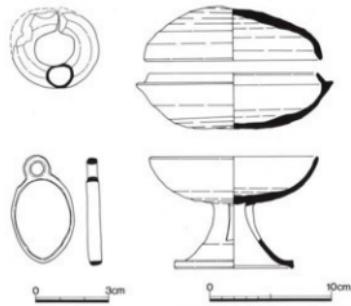


fig. 79 出土遺物実測図



fig. 80 南上空から見た7・8号墳 高塚山の頂部には7・8号墳のような古墳群の中では、大型の古墳が築造されている。両墳より以北の尾根筋にも6基の古墳が存在している。

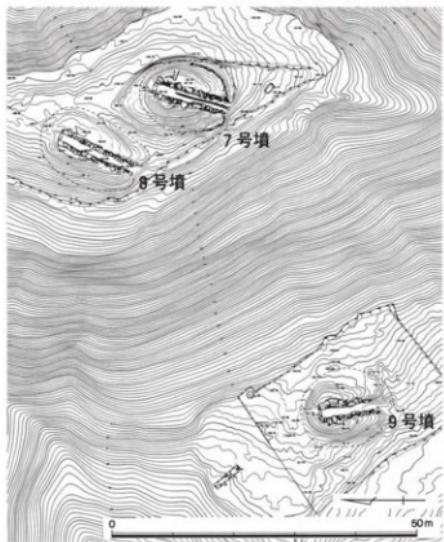


fig. 81 7～9号墳地形測量図



fig. 82 南上空から見た9号墳
7・8号墳が位置する尾根の西斜面に位置している。

8号墳

位置 7号墳のすぐ北側に築造されている。7号墳と同様に南西方向の眺望に優れているが、南側からは高い墳丘を持つ7号墳の裏側に位置し、墳丘の高まりもありないために目立たない。調査前の状況は、墳丘頂部から南にかけて大きな窪みがあり、天井石等の石材の抜き取りがあったことがうかがえた。

墳丘 東西11m、南北17mの楕円形の墳丘である。東側は幅2.5m・深さ80cmの周溝で画しており、尾根の稜線に近い北側も、墳丘裾を浅く削っている。西側は急斜面で盛土も流失したらしく墳丘の境が不明瞭となっている。墳丘高は、東側の周溝底から2mである。(標高186.21m)

また、墳丘の盛土の中には、凝灰質砂岩の破片が多く混入する層位が認められた。これは2号墳においても認められた墳丘の築造と石室の構築工程のすり合わせ(調整段)の結果と考えられる。当古墳では石室側面の目地は3段目と4段目の間ではほぼ水平に通り、凝灰質砂岩の細片が多く含んだ層位とも対応している。



fig. 83 墳丘測量図



fig. 84 8号墳墳丘全景(牛嶋茂氏撮影)

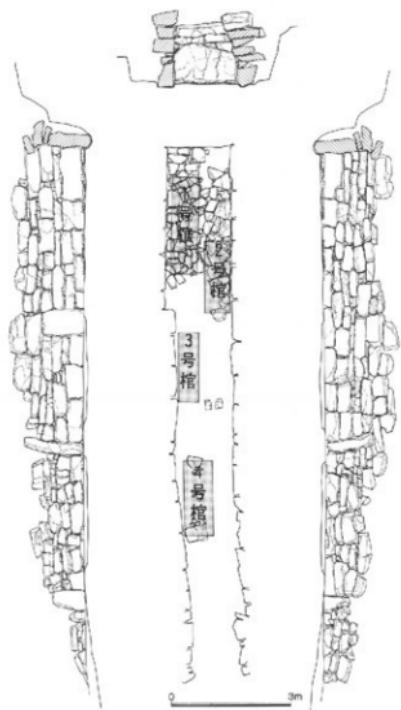


fig. 85 石室実測図

石室 石室は、南西に開口する右片袖式の複室構造の横穴式石室で、全長13.3mと当古墳群中で最も長いものである。石室入口から玄室までの間の両側壁に、二ヵ所、柱状の石材（以下、立柱石と呼ぶ）を立てている。玄室と前室・羨道は、この立柱石を立てることによって区画されている。玄室床面には、凝灰質砂岩の板石を敷きつめていた。また、羨道入口の立柱石から南にも、乱雑に積まれた石組みがあり、この部分が羨道の一部あるいは、羨道の一部と理解するか、今後検討を要するところである。

構築方法 石室の側壁面は、玄室と前室において、ほぼ水平に目地が通って5段の石積が残っていた。2段目までの石積は、ほぼ垂直に積んでいるが、3段目からは少しづつ内傾させていている。羨道では側壁面の目地は水平方向に通らず、むしろ垂直方向に通っていた。石室の構築にあたっては、玄室・前室は、高さを整えながら、水平方向に築いたと推定されるのに対し、羨道では、垂直方向に北から南へ積み上げながら構築したと考えられる。

また、主軸は前室と羨道の境でわずかに屈曲し南に振っており、床面も緩やかに羨門に向かって傾斜している。



fig. 86 羨門より見た石室全景(牛嶋茂氏撮影)



fig. 87 海に向かって開口する横穴式石室(牛嶋茂氏撮影)

8号墳は7号墳とならび古墳群中、最も眺望のよい位置にある。明石海峡を一望することができ、淡路島をはじめ家島群島や遠くには生駒山系、紀淡海峡をも望むことができる。



fig. 88 複室構造の横穴式石室(牛嶋茂氏撮影)

全長13.3mの長い石室内には、立柱石を立てることによって玄室・前室・羨道に分けられる。



fig. 89 玄道での火葬



fig. 90 火葬によって火を受け赤変する側壁(牛嶋茂氏撮影)



fig. 91 玄室での火葬 左側が1号棺、右手前が2号棺

火葬の跡 1号棺 玄室内では、2カ所の火葬の跡が認められた。石室の右（西）側で、長さ2.6m・幅70cmにわたり、床面の敷石が火を受け赤く変色し、その周囲を取り囲んで約10cm程の幅で、黒色に変色した箇所が確認された。火を受け白くなった骨の細片は、この赤変した範囲内で検出された。赤く変色した部分は長方形になっており、木棺の痕跡を示すものと考えられる。これが1号棺で、棺の南と北端の部分で、耳環がそれぞれ2点と土製小玉が出土した。この棺には、耳環の出土状態から2体が納められ火葬されたものと考えられる。

2号棺 玄室の南東隅の2号棺も、敷石が長さ1.9m・幅60cmにわたり、1号棺と同様の変色が観察された。骨片の出土も赤変した範囲でのみ検出された。

また、両棺の接する側壁も火を受け、赤変したり、石材面が剥落していた。

3号棺 前室でも、右側壁に沿った所で火葬の跡を検出した。長さ1.8m・幅70cmにわたって床面が焼け、赤い焼土が広がっていた。右側壁も、基底石と2段目の石材が火を受け赤変したり、表面が剥落していた。

火葬が行われた床面には、溝が1条掘られており、火葬骨もこの溝に落ち込んでいた。この溝は、火のまわりをよくするための通気用の溝と考えられる。

3号棺の北端中央からは、火を受けて劣化した耳環が1点出土した。この耳環の位置から頭位は北側であったと推定される。どの棺でも多くの骨片が出土したが、ほとんどのものが小さな破片となっており、どの部位にあたる骨かは不明である。

また、炭化物等の検出はほとんどなく、火葬の際の燃焼材は不明である。このことは、すべての火葬跡とも共通している。



fig. 92 1・2号棺全景(牛嶋茂氏撮影)



fig. 93 前室で行われた火葬 3号棺



fig. 94 灌道で行われた火葬 4号棺全景(牛鳴茂氏撮影)

4号棺 灌道においても火葬が行われていた。ここでは棺台と考えられる2枚の凝灰質砂岩の板石が、右側壁に沿って検出された。

火葬は棺台に棺を置いた状態で火葬が行われたと思われ、板石の表面にも火を受けた痕跡が残っていた。2枚の板石の間には、3号棺と同様の溝が掘られていた。火葬骨は、この溝の中からも検出された。

4号棺があったと推定される範囲では、床面及び右側壁が火を受け、赤く変色していた。特に床面では、強く加燃されたらしく地表面が焼土となり固く縮まっていた。

北側の棺台のすぐ東側では、融解し表面が発泡した状態のガラス玉数点と、火を受け劣化した耳環が1点出土している。また、土師器や須恵器も、この付近で出土している。この中には2次焼成を受けた形跡があるものと、ないものの双方がある。



fig. 95 4号棺全景 棺台石の周辺から火葬骨が出土した。



fig. 96 玄室遺物出土状況



fig. 97 前室・羨道の遺物出土状況



fig. 98 4号棺遺物出土状況

築造と火葬の時期 この石室から出土した土器の内、最も古いものは6世紀後半のもので、石室の築造はこの頃に行われたと推定される。出土遺物の最も新しいものでは、7世紀前半頃のものがあり、この時期まで追葬が行われたと考えられる。

各棺の火葬時期については、出土遺物と木棺の位置関係など詳細な検討が必要である。

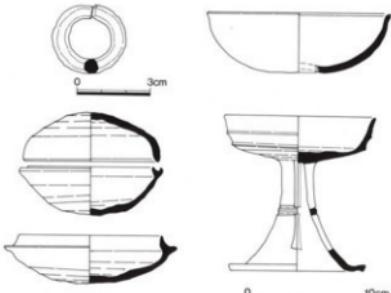


fig. 99 出土遺物実測図

9号墳

位置 7・8号墳がある尾根の西側斜面にある小さな平坦地に築造されている。他の古墳は、すべて尾根の頂部あるいは鞍部に築造しているが、9号墳は、谷に向う斜面の眺望の悪い所に位置している。墳丘頂部の標高は165.80m、8号墳との比高差は32mである。発掘調査前の状況は、墳丘の中央に大きな窪みがあり、石材が露出していた。墳丘の南側には、須恵器片が散乱しており、盗掘を受けていることがうかがえた。

墳丘 墳丘は、東西13m、南北15mの楕円形で、東側は明瞭な周溝が半周しているが、西側では、わずかな痕跡をのこす程度となっている。もとは全周していた可能性が高い。墳丘の現存高は西側の墳丘裾から3.5mである。

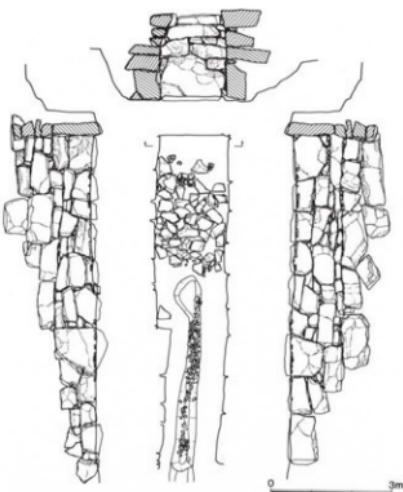


fig. 100 石室実測図



fig. 101 9号墳全景(牛嶋茂氏撮影)

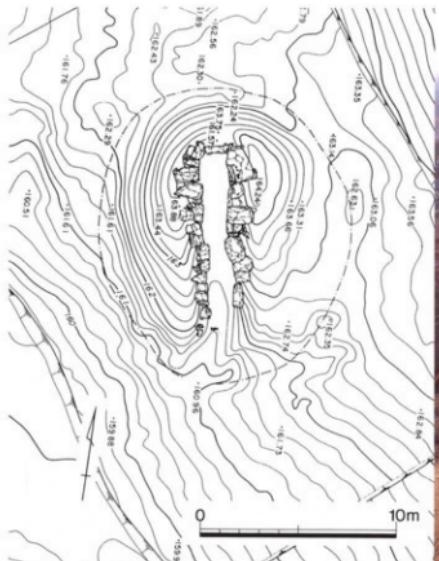


fig. 102 墳丘測量図



fig. 103 7号墳墳丘から見た9号墳(牛嶋茂氏撮影)



fig. 104 7・8号墳の西斜面に築かれた9号墳(牛嶋茂氏撮影) 右後方は7号墳。



fig. 105 石室全景(牛嶋茂氏撮影)

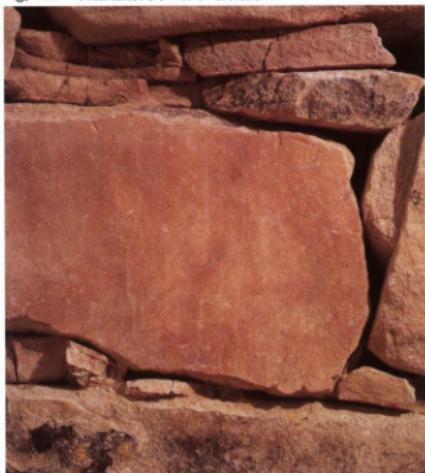


fig. 106 魚の線刻画(牛嶋茂氏撮影)

線刻画石の位置 玄室北東隅、左側壁の4段目で最も奥壁よりに魚を線刻した石材がある。この他にも、この4段目で、魚を線刻した石材から漢道側へ、3石目の石材面にも、鋭利な工具で刺突された石材があるが、何を表現したものかは不明である。

魚の線刻画 線刻された石材は、他の石材よりも石材面が平滑に仕上げられ、石材も粒子が緻密なものが使用されている。線刻は、この石材の右半分に描かれている。線刻は、非常に細い繊細な線で描かれている。魚は上下に2匹描かれており、双方とも頭を左にして描かれている。

下方に描かれた魚は、右端に尾鰭が表現され、体の下方には鰓を表現したと思われる弧線が描かれている。上方の魚は、体部が橢円形に描かれ、胸部の付近に小さな鰓を表現している。尾鰭は弧線が描かれているが不明瞭である。



fig. 107 玄室全景(牛嶋茂氏撮影)



fig. 108 玄室床面の状況(牛嶋茂氏撮影)

石室 凝灰質砂岩を使用した右片袖式の横穴式石室で、7号墳に次いで大きな石材を多用する。南に開口しており、羨道から石室外へ幅2mの墓道が掘られている。

石室は、玄室で5段、羨道で4段の石積が残っていた。石室の構築にあたっては、3段目までをほぼ垂直に積み、4段目からは少しづつ持ち送っている。石室壁面も3段目までは日地が通っており、4段目からは、大型の石材を多用している。また、玄室北西隅では、石材を奥壁から側壁に斜めに架け、組合せながら構築されている。このような石室の構築方法は、6号墳・7号墳にも認められた。

石室の床面状況 玄室には、板石を敷いており、玄室の南半から墓道にかけて排水溝が掘られていた。盗掘を受け床面からは、敷石の隙間に落ち込んでいた2点の耳環が出土しただけであった。

高塚山古墳群 一覧表

古墳名	墳形	墳丘規模	墳丘高 (現高)	埋葬施設	石室全長	玄室長	玄室幅	玄室高 (現高)	羨道幅	羨道長	羨道高 (現高)
1号墳	楕円形	東西 12m 南北 17m	(2.5m)	横穴式石室 T字形の玄室 (複室構造)	9.6m	1.2m	2.1m	(1.1m)	1.2m	5.6m	(1.3m)
						前室長	前室幅	前室高			
						2.8m	1.3m	(1.1m)			
2号墳	方形	東西 11m 南北 12m	(1.6m)	横穴式石室 右片袖式	6.8m	3.5m	1.4m	(1.7m)	1.2m	3.5m	(1.3m)
3号墳	不明	不明	不明	横穴式石室 無袖式	3.2m	2.0m	1.1m	(0.7m)	0.9m	1.2m	(0.3m)
4号墳	円形	径 13m	(1.9m)	横穴式石室 左片袖式?	5.8m	2.9m	1.2m	(0.8m)	0.8m	2.9m	(0.6m)
5号墳	不明	不明	不明	横穴式石室		不明	不明	不明	不明	不明	不明
6号墳	円形	東西 12m 南北 11m	(1.8m)	横穴式石室 右片袖式	6.0m	3.6m	1.3m	(1.7m)	1.1m	2.4m	(1.1m)
7号墳	楕円形	東西 13m 南北 17m	(4.5m)	横穴式石室 右片袖式	10.7m	6.2m	1.7m	(2.6m)	1.4m	4.5m	(2.2m)
8号墳	楕円形	東西 11m 南北 17m	(2.5m)	横穴式石室 右片袖式 (複室構造)	13.3m	4.1m	1.5m	(1.8m)	1.3m	5.5m	(1.5m)
						前室長	前室幅	前室高			
						3.7m	1.4m	(1.8m)			
9号墳	楕円形	東西 13m 南北 15m	(3.5m)	横穴式石室 右片袖式	8.6m	5.2m	1.7m	(2.3m)	1.4m	3.4m	(2.0m)

まとめ

1. 今回は、高塚山古墳群の半数を超える9基の古墳の発掘調査を実施した。埋葬施設は、すべて付近で採れる凝灰質砂岩を使用する横穴式石室であった。3号墳以外は、古墳の石室は天井石や側壁の一部が失われていた。これらは盜掘によるものの他、石材を利用するため抜き取られたものと推定される。多くの古墳では盜掘を受け遺物が失われていたが、8号墳のように、盜掘による搅乱をまぬがれ、埋葬の状況を明らかにできたものもある。
2. 高塚山古墳群の実態は、今まで不明な点が多くあったが、今回の調査で石室の構造や埋葬の方法について多くの発見があった。まず、1号墳や8号墳のような複室構造の横穴式石室は、神戸市では初めての発見で、県下においても9例目となる貴重な資料となった。特に1号墳は、T字形の石室で複室構造となっており、近畿地方では初めての検出例となった。
- 8号墳の横穴式石室内で行われた火葬跡の検出例も、神戸市では初めてのものとなった。石室内では、玄室や前室・羨道で火葬が行われているが、各棺の火葬の時期や火葬の方法は、今後、科学的な分析とあわせて検討されなければならない課題である。
- 2号墳や9号墳の石室壁面に描かれた線刻壁画の発見は、市内では、北区の北神第3地点古墳の石室内で「○」印の線刻があり、これとあわせて3例となった。県下でも7例と貴重な資料となった。
3. 今回発掘調査を行った9基の石室の内、1号墳については、西区樅台6丁目の西神中央公園内に移築復元を行った。石室復元にあたっては、できるだけ発掘調査時の姿を再現したが、石材が崩れていた部分については修正をおこなった。石材については、石材強化剤を含侵させ、石材の劣化を防止している。さらに、強化ガラス張りの上屋を架け、広く一般に公開している。
- また、2号墳で発見された馬の線刻画石も、石材強化などの科学的な保存処理を行い、神戸市埋蔵文化財センターにおいて展示・公開をしている。

高塚山古墳群

平成6年3月印刷

平成6年3月発行

発 行 神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL. (078)3 22-5798

印 刷 有限会社アロエ印刷
神戸市中央区中町2丁目3番8号
TEL. (078)3 71-3831

広報印刷物登録・平成5年度 第335号 A-6類 領価 ¥800

